

HAB研究機構附の主な活動

HAB附属研究所長

佐藤 哲男

従来にくすりの開発は、化学的に合成された物質や、天然の植物、かびなどの成分を抽出し、それがどんな病気に効くのかを動物実験や臨床試験により選別してきました。これらの手続きを経て、1万種類にもものぼる候補物質から一つの新薬に絞り込むためには通常10数年の年月と莫大な費用を要します。そしてふるいにかけてたくすりの候補物質について、ネズミやイヌなどの実験動物で調べ、その後国で決められた手順にしたがって、ボランティアや患者に投与して、その安全性や治療効果を判定します。このような過程を経て成人病治療薬を含む多くの新薬が生み出されてきました。しかしながら、動物とヒトではくすりに対する反応がかなり違う場合が多く、新薬開発の大きな悩みとなっています。さらに、癌や糖尿病、認知症など、特効薬の創製が待たれる難病も数多くあります。言い換えれば、

従来のくすりの開発方法では特効薬が作れなかった病気が難病として残ったとも言えます。この様な開発が困難な医薬品の場合、それを解決する一つの方法として、最近では欧米を中心にこれらの病気の患者さんの組織を直接に使って遺伝子の情報を調べることにより新しいくすりの標的が次々と発見されています。

HAB研究機構は、新薬開発の支援機関として、ヒトの組織や細胞を使ってくすりに対する動物とヒトとの間の違いを早期に予測し、より安全な新薬の開発に情報を提供しています。ヒト由来の組織、細胞を使用するに当たって最も重要な問題は倫理的配慮です。当研究機構では国内の有識者による独自の倫理審査委員会があり、ヒト細胞、組織の使用に当たっては倫理的に万全な体制を確立しています。

また、毎年、一般市民を対象とした公開講座を開催し、皆様に最先端の医療やくすりに関する情報を提供しています。

HAB 研究機構は皆様と共に医療の改善や考えていく **NPO** 法人です。